



つちくらげ病の被害にご注意

—木の近くで焚き火をしない—

はじめに

つちくらげ病はツチクラゲというきのこの1種が起こす病気で、近年別荘地で発生し、しばしば問題となっています。焼け跡から病気が発生するという変わった性質があり、別荘地でバーベキューなど焚き火をすると、せっかく残した別荘地内の木が本病に罹り枯れてしまうことがあります。さらに病気が広がり、隣の別荘地の木まで枯らし、問題になる場合もありますので注意してください。いったん被害が出てしまうと防除が難しいため、木の近くでは焚き火をしないように十分注意する必要があります。

本病の生態

山火事や焚き火で地面が暖められると、土壌中で眠っていたツチクラゲの胞子が発芽し、菌糸が土の中を広がり始めます。菌糸は同心円状に広がり、到達した木の根を枯らし、木の根株部分ぐらいまで菌糸が這い上り、木を枯らしてしまうことも頻繁に見られます。きのこは茶色の脳みそのような形をしており、雨の多い時に発生します。針葉樹で被害が多いのですが、ニセアカシアなどでも被害が知られています。

特徴と見分け方

・被害の特徴

本病に罹ると下枝から枯れ上がり、最終的には、木全体が枯死します(写真1)。山梨県では特にアカマツとカラマツで被害が多く見られます。集団的に枯れることが多く、枯死した集団の中心付近に焚き火の後があった場合は本病を疑って下さい。枯れた木の根元や太根の樹皮下には本病の菌糸が付着し、やがて放射状の腐食痕が菊花状に現れます。被害は年々同心円状に広がり、その円の中に入った木を枯らします。拡大は数年で自然に収まり病気は消滅します。



写真1 別荘地におけるアカマツのつちくらげ病による被害

・きのこの特徴

きのこは茶色～茶褐色の脳みそのような形で、大きさは、直径5～10cm程度(写真2)。梅雨や秋雨の様な長雨の時期に発生します。このきのこは乾くと縮み、黒く堅くなり、長期間腐らないため、本病の鑑定に役立ちます(写真3)。被害木周辺の土壌から発生するのが普通ですが、被害木下部から直接出ることもあります。枯木の近くでこのきのこを見かけたら、枯死の原因は本病と考えてよいと思います。



写真2 被害木根元から発生したツチクラゲのきのこ

対 策

予防が一番の対策になります。木の近くで焚き火をしないことが大切です。最近、脚付きのバーベキューセットなどが販売されており、地面から十分離れたところで火を使用すればつちクラゲ病の心配はありません。

病気が発生した場合は、病気が進んでいく方向に深さ70cm程の溝(遮断溝)を掘り、そこで菌糸の伸長を食い止めます。



写真3 乾燥して黒く縮んだツチクラゲのきのこ

作成:山梨県森林総合研究所
森林研究部 生産科
大澤 正嗣

連絡先
TEL 0556(22)8001 FAX 0556(22)8002
メールアドレス sinsouken@pref.yamanashi.lg.jp